

宿縁

十二月号

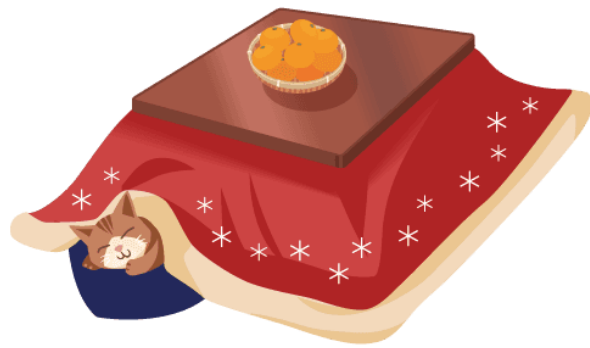
千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号

浄土真宗
本願寺派
中原寺

TEL 0477-372102
FAX 0477-372102

感動が

人生を転換する



「念仏の道は ひき算から
足し算の変換である」

これは山門にある掲示板に書いた十二月の言葉です。

今年は、新型コロナウイルスの感染拡大に世界中が翻弄され続けた一年です。

毎日毎日感染者数と死者の数が報じられることにはささかうんざりします。なぜなら、人間の「死」を数量化していることはまた「いのち」そのものへの視点をそらしている

ると考えられるからです。「いのち」とは決して対象化、数量化するものではないことを教えるのが正しい見方なのです。

鈴木章子(あやこ)さんは北海道の西念寺の坊守さんで四人の子供のお母さんです。

昭和五十九年五月、四十二歳の時、乳がんの告知を受け、亡くなるまでの四年間に左肺に転移、右肺に転々移、脳にまで転移してしまうのですが、闘病生活の中でみずみずしいいのちへの思いを語り、詩に残してくれました。

冒頭の言葉がある『変換』という彼女の詩を紹介しつつ、しっかりとわが「いのち」に向き合いたいと思います。

『変換』

死に向かつて 進んでいるのではない
今をもらって生きているのだ
今ゼロであって 当然の私が
今生きている
ひき算から足し算の変換
誰が教えてくれたのでしょうか
新しい生命 嬉しくて 踊っています
“いのち 日々あらたなり”
うーん わかります

この詩は、『お念仏』という次の詩に深く根ざした鈴木章子さんの得た躍動感なるものを感じます。

『お念仏』

お念仏いただいて こんな嬉しい身にさせてもらいました
浄土に還られました父母のおかげでございます

私もまた近く 父母と同じく
愛する愛する 子供達の
お父さんの南無阿弥陀仏になって
この喜びの中に 導く身にさせていただけますこと無上の喜びです
ナムアマミダブツナムアマミダブツ
どうぞどうぞ お念仏の相続
どうぞ お念仏ひとつでございます

この詩には、南無阿弥陀仏に包まれている喜びがあります。人間の悲しみの情をこえて仏と生まれていく喜び。「嬉しい身にさせてもらいました」との言葉に、生命のいきいきとした勢いさを感じます。

鈴木章子さんのお兄さんは大谷派の著名な小川一乗先生ですが、妹の章子さんについて『慈悲の仏道』で、こう語っています。

『弔問の方は「妹さん、かわいそうだったですね」とおっしゃる。「どうしてですか」と言うと、「妹さんは四十八歳でお亡くなりになった。若くして亡くなってお気の毒です」と。ですから、何歳まで生きたらかわいそうでなくなるのですか、と聞きたくなる。妹は若くして死んでいったけれど、喜んで念仏してこの世を去っていった。かわいそうではなく幸せな妹です。」と。また、「ああ、そうですか。では、平均寿命まで生きたらお気の毒ではないんですか」と、言ってしまうと。一瞬一瞬、ひとときひとときをい

ただいて生きているということに気づき喜んでいった章子ほど幸せ者はございません」と述べられています。続けて小川先生は、「若くして亡くなるとか、老いて亡くなるとかそんなところに問題があるのではない。自分が今いただいているいのちを本当に喜ぶこと。ともすると平均寿命などを考えながら、今、私は何歳だから、あと何年だ、とすり減っていくようないのちと考えるがちではないだろうか。死に向かつてすり減っていくようないのちの考え方は違う。今の一瞬、ひととき、ひとときが、今いただいた尊いいのちだ。

弔問の方に、そのように言うとその方は「いやいや、お子さまたちがかわいそうですね」と言葉を交わすのだそうですが、何を言うんだ。章子は夫の住職や子どもたちの南無阿弥陀仏になるんだ。南無阿弥陀仏となつて、いつでも、どこでも一緒にいることができるんですよ。その南無阿弥陀仏の喜びの世界に生まれていく、ただ死んでいくのではない。「みんなの南無阿弥陀仏になるよ」と。いのちを終えていく母を見送った子どもほど幸せなものはないんだ』と。

確かに「お気の毒ですね」、それは素直な言葉です。素直な言葉だけど、それはやはり人間の尺度の憐れみです。そこを突き破っていく、その悲しみを突き破っていく、喜びに通ずるのが南無阿弥陀仏だ、お念仏の教えだと味わわせていただきました。

私たちには、人生の中でいろいろな感動に出会いますが、大体は一過性のもので、そのうちすつと薄れていくものです。念仏の道はそういうものでなくずっしりとわが心の底にすわる感動です。

【寺灯雑記】

○コロナ禍での報恩講法要が勤まる

11/20～21

今年には新型コロナウイルスの影響により、異例の形での報恩講となりました。

例年、婦人会の方々に精進料理を拵えていただき、参拝者と一緒にいただくお齋の接待を両日ともに自粛。また、二十日の法要を昼間に行なったため、壮年会の方々に山門から参道に並べていただいた灯籠の設置もなし。さらに毎年、御満座法要は近隣寺院の僧侶方とともに、賑々しくお勤めしますが、今年の内陣出勤は住職、前住職など三人でのお勤めとなりました。

しかし、そのような状況だからこそ、御満座法要の「正信念仏偈」のご和讃を壮年会、婦人会の代表の方にも担当いただくなど、コロナ禍における新たな報恩講法要の形で勤修することができました。

また、山崎龍明師のご法話も「信心の風光―病とともに生きる―」とのテーマで、お話しされ、コロナ禍においても自粛はしても、委縮しない生き方についてお話しくださいました。

【仏教語講座「油断」(ゆだん)】

「馬鹿につける薬はない」「馬鹿とハサミは使えよう」「馬鹿の一つ覚え」などというように、馬鹿は愚かな人、知恵の浅い人のことをいう言葉です。

ほかに、「この費用は馬鹿にならない」「ネジが馬鹿になる」「正直者が馬鹿を見る」など、いろいろなニュアンスの慣用句がたくさんありますね。

馬鹿の語源には、昔、中国に愚かな皇帝

がいて、鹿と馬を見誤ったことによるという説。奈良に来た帰化人が、馬を放牧したが、馬は馬酔木(あせび)を食べて死んでしまったのに、今度は鹿を放牧したのを嘲笑したことによるという説。馬鹿は「破家(はか)」で、家産を潰すほどの愚か者という意味からきたという説などいろいろあります。

『広辞苑』には、「梵語 moha (慕何(はか)、すなわち無知の意からか。古くは僧侶の隠語。馬鹿は当て字」と記されています。

サンスクリット語「モーハ」は無知、迷いの意味で慕何、莫訶、莫迦、婆迦と書かれ、馬鹿の語源とする資料は多くあります。

「ばかでかい」「ばかにうまい」の「ばか」は大きい、多いという意味のサンスクリット語「マーハ」ではないかと。

バカバカしい話ではなく、馬鹿は仏教語だったのでね。

(大乘12月号より転載)

【令和三年(二〇二二年) 年回表】

- ・一回忌…令和二年(二〇二〇年)
- ・三回忌…平成三十一年、令和元年(二〇一九年)
- ・七回忌…平成二十七年(二〇一五年)
- ・十三回忌…平成二十一年(二〇〇九年)
- ・十七回忌…平成十七年(二〇〇五年)
- ・二十三回忌…平成十一年(一九九九年)
- ・二十五回忌…平成九年(一九九七年)
- ・二十七回忌…平成七年(一九九五年)

・三十三回忌…昭和六十四年、平成元年(一九八九年)

・五十回忌…昭和四十七年(一九七二年)

亡き方を偲ぶのは仏縁に遇う尊いひと時です。ご法事のお申し込みは、お早めにお願ひいたします。

【法座・行事の案内】

○婦人会法座(正信偈を学ぶ)

*十二月五日(土) 午後一時

○門信徒会役員会

*十二月五日(土) 午後三時三〇分

○壮年会法座

*十二月十三日(日) 午後三時

(年末懇親会は中止いたします。)

○教行信証を学ぶ(信文類の序)

*十二月二十六日(土) 午後二時

講師…前住職

○元旦修正会

二〇二二年一月一日(祝) 午前八時

新年を迎えるにあたって、阿弥陀さまのご加護のもと、充実した日々を過ごすことを願ってご家族で参拝いたしましたしように。

・おつとめ「正信偈」

・年頭法話 住職、前住職

*コロナウイルス感染防止のため、ご流盃の儀・お雑煮の接待はございません。

※各法座・行事にご参加の際はマスクの着用をお願いいたします。

【築地本願寺 成道会布教大会】

十二月八日はお釈迦さまがおさとりを開かれた日と伝えられ、この日を「成道会(じようどうえ)」とよんでいます。

およそ二五〇〇年前、人間として生まれ、人間の幸福について悩み続けられたお釈迦さまは三十五歳のこの日、菩提樹の下でついに「覚り」を開かれ仏陀(ブツダ)(覚者)となりました。

この日をご縁にお釈迦さまがお説きくださった阿弥陀如来の救いをお聴聞にあずかる法座として、築地本願寺では毎年、布教大会が開かれます。

本年は左記の日程にて開催されます。

十二月八日(火) 午後一時三十分～四時

第一席 西原大地師(柏市 西方寺)

第二席 宮本義宣師(川崎市 高願寺)

第三席 成田善真師(横浜市 善行寺)

第四席 阿部信幾師(みどり市 西福寺)

布教大会の様子は、築地本願寺の公式YouTubeチャンネルにて配信されます。

是非ご聴聞ください。

【十一月の掲示板のことば】

念佛の道は
ひき算から足し算の
変換である

※「YouTube 中原寺」で検索

前住職が10分程の法話を配信中です。